

# L'Autre et le collectif dans l'écriture autobiographique

自伝的エクリチュールにおける他者と集合性

**William MARX**

ウィリアム・マルクス (パリ第10大学)

## Écrire une biographie collective des Lettrés

〈文人〉の集合的伝記を書くとはいかなることか？



**Keiko TSUJIKAWA**

辻川慶子 (白百合女子大学)

## Nerval, plagiat et autobiographie dans *Les Confidences de Nicolas*

ネルヴァル「ニコラの告白」における剽窃と自伝

Commentateur **Yasusuke OURA** 大浦康介 (京都大学)

日時 **2011年10月15日(土) 午後1時より le 15 octobre 2011 à partir de 13h**

場所 一橋大学 東キャンパス 国際研究館4階 大教室 (JR中央線「国立」下車)

Université Hitotsubashi Campus-Est LS/CGE Building (Kokusai Kenkyu Kan)

4<sup>e</sup> étage La grande salle (Dai-Kyoushitsu) (Kunitachi, La Ligne Chuo, JR)

言語 フランス語 (日本語通訳: 片岡大右・森本淳生) conférences en français avec la traduction japonaise

入場無料 entrée libre 連絡先 森本淳生 Atsuo Morimoto (atsuo.morimoto@r.hit-u.ac.jp)

主催 科学研究費補助金・基盤研究(B)「生表象の動態構造——自伝、オート・フィクション、ライフ・ヒストリー」

13:00～13:10 趣旨説明

13:10～14:50

Keiko TSUJIKAWA 辻川慶子 (白百合女子大学)

### **Nerval, plagiat et autobiographie dans *Les Confidences de Nicolas***

#### **ネルヴァル「ニコラの告白」における剽窃と自伝**

子供時代の回想 (『散策と回想』) や自らの狂気の幻想 (『オーレリア』) など、自伝的要素の強い作品を1855年の死の前後に相次いで発表するネルヴァルは、自己を書くのに先立ち、18世紀作家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの伝記「ニコラの告白」(『幻視者たち』(1852)所収)を刊行している。ここで興味深いのは、「ニコラの告白」がネルヴァルの「偽装された自伝」だと指摘されるものの、そのほとんどがレチフ作品のコラージュからなる剽窃に近い作品だという事実である。ネルヴァルにおいて自伝的エクリチュールは、他者の自伝の書き直し(レクリチュール)といかに関わるのか。自伝とは、自己の特異性を表明する場であると同時に、他者と経験を共有する場にもなるのではないか。自伝を読むことと書くこと、さらには書き直すという営為を通して、ネルヴァルにおける自伝とその集合的性格について考察を試みたい。

14:50～15:10 休憩

15:10～17:10

William MARX ウィリアム・マルクス (パリ第10大学)

### **Écrire une biographie collective des Lettrés**

#### **〈文人〉の集合的伝記を書くとはいかなることか？**

集合的伝記とは何か？ 孔子から、キケロ、プルタルコス、菅原道真を経て、ロラン・バルトにいたる文人(知識人、教授、文献学者)がなすこの広大な文化横断的、歴史横断的な集合体に対して、何故に今日、新たにまた集合的伝記を著そうとするのか？ 2010年にアカデミー・フランセーズ・モンティヨン賞を受賞した近著『文人の生』(*Vie du lettré*, Paris, Éditions de Minuit, 2009)における研究のプロジェクトとは、このようなものであった。問題となるのは第一に、文人の活動の本性そのものを問うことを通じて、こうした企図が正当化できるのか、また必要なのかを検討することである。また、文人があらゆる方面から脅威に曝されている現代世界においては、証言し調査をするというかたちで、問題を具体的に意識化する必要がある。しかし、調査といっても、狭義の歴史的なものではなく、民族学的、あるいは(バルトのプロジェクトをふたたび取り上げるなら)エトス研究的な調査であり、そのため、研究の対象としても、伝記的エクリチュールが取り上げられることになった。こうした研究を通じて、フランスにおいて40年来、文学的経験の中心にあるあの日常的なるものを考慮することも可能になる。とはいえ、ここで思い浮かべるべきものは、個人の生ではなく、集団の生である。そして、集合的性格をもつ伝記は、その構造にかんして多数の制約を課されるものでもある。本講演では、この点について明らかにするように努めたい。

17:10～18:00 コメント、質疑応答

\* ウィリアム・マルクス氏は、パリ第10大学教授。学位論文をもととした最初の著作はヴァレリーとエリオットを対象としたものだが、現在では比較文学的な見地からより広範な問題を縦横に論じる、フランスを代表する研究者。主要な著書として次のものがある。*Naissance de la critique moderne. La littérature selon Eliot et Valéry, 1889-1945* (Artois Presses Université, 2002); *L'Adieu à la littérature. Histoire d'une dévalorisation. XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècle* (Minuit, 2005); *Vie du lettré* (Minuit, 2009).